

# 団長の稽古日記

「場当たり・その2」

場当たりというのは、実際の舞台を使い、総合的に舞台そのものを決定していく作業なので、演出兼作家の私としては、出来る事ならば妥協はしたくない。

しかし、「決められた予算内で」となると、スタッフさんサイドの立場から「これ以上は厳しい！」というも理解出来る。

それは舞台セットにしても、照明にしても、音響にしてもそう。

そんな状況下ではあるが、もちろん私の想っているのは、各スタッフさんも理解してくれているので、「でも、しかし、だって」とは絶対言わず、知恵と工夫と「やる気」で、なんとしてでも演出の要望に応えよう！と、皆さんがすごく一生懸命、プロとしてのプライドを掛けて挑んでくれるので、とても頼もしい。

だからこそ私も遠慮なく、自分の想いが伝えらる。

それは舞台の場面転換にしてもそうで、極力短時間に、演出家の要望通りの場面を「サクッ！」と作れなければならない。ただ：：こちらは役者が転換スタッフも兼ねているとあるので、場当たりでは稽古場以上の集中力が必要。

何せ、さっきまで芝居をして役の人物として集中していたのに、場面が暗くなつた途端、気持ちを切り替え素の自分に戻り、暗闇の舞台上に大勢の人間が交差する中、決められた手順で場面転換を行わねばならず意外と大変。

これまでは明るい稽古場で、備品であるテーブルやなんかを代用し、「ここに壁があるつもり」「ここにカウンターがあるつもり」という環境下で「場面転換」作業を行っていたのに、いざ実際の舞台で、しかも暗転の中で、限られた短い時間の中の転換となると、スムーズにはいかず、今回の場当たりも何度も何度も中断し、上手くいかない箇所を繰り返し返す。

特に大変な場面転換は、「老人ホーム」から「居酒屋門出」になるシーンと、その逆の「居酒屋門出」から「老人ホーム」に変わるシーン。

一番の関門であった「居酒屋のカウンター」が「老人ホームの棚」に早変わりするところと、居酒屋のお品書きが沢山書かれた壁が、老人ホームの素敵な壁に変身するところは、舞台美術の三井さんの素晴らしいアイデアで、素早く変身する事が出来るのだが、居酒屋の椅子から老人ホームの椅子、居酒屋のカウンターやテーブルの上に置かれた小道具の出ハケ（出す・ひっこめる・）はなかなか大変で、

舞台スタッフの舞ちゃんと高橋さんの連携プレーと指導の下、「最善の方法」を考え出していたとき、まずは明るい中で手順を確認し、次に実際の暗闇の中で行えば、「まあーなんとか出来るでしょう。」というレベルになる。

本当には「まあーなんとか！」ではなく、パツチリ！大丈夫です！と自信を持てるまで繰り返し返したところではあるが、みんなが納得するまで繰り返し返す時間はさすがにないので、役者は役作りの大変な中ではあるけれど、各人が瞬時に転換スタッフへと頭を切り替え、素早く確実に転換が出来るようなイメージトレーニングを行ってもらうしかない。

ただこの暗転中の舞台転換って、大変なんだけど、個人的には実は結構好きだったりもするのですねえ。暗転になった瞬間に、音もたてずに手際よく動き、場面を転換していく。時間との勝負だけど、もちろん掛け声もかけられない。

舞台上には色々な人が交差している。ましてや目の前はお客様がいます。

その緊張感の中で素早く行動し、そして場面転換が終わり、音楽も終わって明かりが入ると、さきほどの「戦場」が嘘のようにふつーに芝居が始まる。あの緊張感と達成感がたまらない。

でもさすがに今回は、舞ちゃんと私で「社長のデスク」を素早く移動した直後に明かりが入り、すぐに私が演じる「源さん」が登場しなきゃいけないのは、ちょっと気忙しかったけれど、転換稽古の時が私が勘違いをしてミスをした分、張り切らねば！と、特にこの転換は気合を入れました。

そうこうしていると、おお！もう21時を回っている。

場当たりは前半が終わったところ。完全退館時間まであと30分はあるけれど、区切りもい事だして事で、この日はここで終了する事に。

「では、今日はここまでにしまーす」という高橋舞台監督の号令の下、みなは一斉に帰り支度を済ませ、ロビーに集合。役者もスタッフも、とにかく用心をして、明日の初日は万全の態勢で劇場に来てもらいたい。

「今日は皆さん、真っすぐ帰ってよお、飲み屋に寄らないでねえ！」と私が言うのと、みんな笑いながら「分かってますよお」との笑顔の答え。

明日も天気は良さそうだ。大きく深呼吸をしつつ、帰路についたのでした。